

朗読劇『いのちのいろえんぴつ』

この朗読劇は、北海道厚岸町という町で2003年に脳腫瘍によって、わずか11歳で亡くなった豊島加純さんが、先生からもらった12色のいろえんぴつで描いた絵と詩を綴ったものを、朗読用に構成したものです。

それは、絵本というよりは、絵と詩で綴られた記録史という方が正しいかもしれません。7歳の時に、先生に褒められた詩。そして発病後、次第にマヒが現れてからの詩。右手が使えなくて、左手で書いた詩。加純さんの病気が進行し、マヒが強くなっているのが、文字の様子で痛々しいほど伝わってきます。

それでも、憂鬱な気分にならないのは、加純さんの素直で純粋に生きようと頑張っている詩のおかげ。彼女の詩は、病気のつらさを綴るのではなく、明日に希望をもち、生きることをあきらめない少女の素朴な感情があふれています。純粋で、優しく、そして強く生きることを願いながら、一人の少女が生きた証。

愛する人とも、必ず別れていくいのち。それは、私自身の問題です。だからこそ、出逢えている「今」をどう生きるのか・・・。

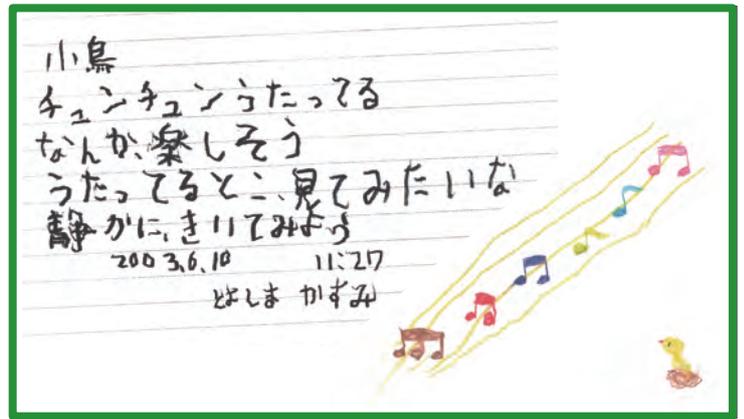
「精一杯生きること」を教えてくれる加純さんの詩を通して、朗読劇という形で皆様に「生きることの意味」を問いかけます。ごゆっくりとご覧下さい。

★朗読塾・チームいちばん星

2005(平成17)年、北海道内の浄土真宗の僧侶と坊守の有志で結成した「朗読パフォーマンスチーム」。小さな輝きであっても、「生きることの意味」を伝えるひとつの光になりたいという願いから命名。朗読に「歌・照明・BGM・そして法話」を取り入れながら、小中高生や仏教にご縁が無い方々に、少しでも仏教のエッセンスが伝わる方法を模索している。

2011(平成23)年の京都西本願寺公演を始め、東京、大阪、熊本、仙台など、北海道外でも小・中・高生の「いのちの授業」、保育士の研修会、人権擁護の大会などで、「いのち」をテーマにした作品を通して“生きる力”を届けたいという願いで活動中。

2026年、結成22周年。総勢11名



書籍『いのちのいろえんぴつ』から



朗読劇『いのちのいろえんぴつ』から